

會



報

1963年8月

228

日本山岳会

日本山岳会は、これ迄、マナスル、ヒマルチュリ等の登山において幾多のヒマラヤ経験者を養成してまいりました。その後、これ等の人々は個々の学校、団体等において、それぞれ、海外登山の指導的役割を演じており、既に数々のヒマラヤ登山が行われ、且、計画されている現状であります。然し、現在の段階においては、個々の団体を以て編成される登山隊は、その力量、経済的な背景等に自ら限度があり、大きな登山目標に対して、万全の態勢を整えた登山隊を送り出すためには、どうしても全日本的な基盤の上に立ち優秀な人材をよ



エヴェレスト峰登山計画について

日本山岳会ヒマラヤ委員会

委員長 三田 幸夫

りすぐって計画されたものでなければならぬと考えられます。

この意味において、ヒマラヤ登山に対する日本山岳会の役割は今も決して終了した訳ではなく、会の第一義の目標として海外登山の実績を挙げているのも当然のことであります。

今、我々が次期の登山目標として、取上げようとしているのは、世界最高峰エヴェレスト峰（八、八四八米）であります。

この山の登攀史については、申

上げる迄もなく、英国、スイス、インド、アメリカ、中共等各国の登山隊により、再三に亘り登頂、試登がなされておられ、そのルートも北東山稜、南東山稜、西山稜とも既に明らかとなっており、その中で、今更という感を抱かれる方もあろうかと存じますが、登攀の対象として見た場合、世界の最高峰としての価値は毫も損われること無く、又、その高度を克服する為の困難さは、厳然として残るのがあります。

マナスル登頂より十年近くを経過した日本の登山界として、更に新しい境地を開き、将来の飛躍に備えて、大きな経験と、力を蓄積するためには、どうしても一度は踏まねばならぬ宿命の峰、それがエヴェレストであるとも考えられるのであります。

この計画を実施するに当り、登山の面から考えられますことは、先にも挙げた、八、〇〇〇米を越す高度の問題であります。即ち、マナスルで得られた、八、一二五

米の体験を基にして、更に七〇〇米以上高い地点で活動するという大きな課題を持っております。これは、地形が十分明らかになっているとはいえず、決して容易ならぬ問題でありましょう。具体的に申せば、マナスル登頂以後、日本の登山界としては、七、〇〇〇米の経験者はかなり増えたといえ、八、〇〇〇米以上の高処に宿営した経験者は皆無という現状であります。随いまして、この計画を完遂するためには、登山装備全般は勿論



酸素補給器、通信機、高処医学高層気象等、あらゆる分野の総力を結集して万全の準備を整え

ると共に、全日本山の優秀な人材を網羅して、考慮得る第一級の登山隊を編成しなければならぬことは当然のことです。

以上述べました趣旨により、本委員会としては、昨年来、慎重に検討をつづけた結果、相当長期の準備期間を経て一九六六年プ

代表すべき強力な登山隊を派遣することを決定致しました。

その第一段階として、直ちにネパール政府と折衝の結果、同政府より、正式に一九六六年の登山許可を得、目下計画の細部につき検討をつづけておりますが、かなりの準備期間がありますので、高処の人体に及ぼす影響の調査を中心として、登山装備、酸素補給器の研究開発、及び隊員の訓練等に重点をおいて、準備をすすめる予定であります。又登山活動の成否を左右する高処の気象の問題、高処生理の解明等に対して、貴重な資料を得るため、学術班も加え、隊の規模はかなり大きなものにする構想であります。

これに要する経費は外貨予算六四、四一三ドル（外貨裏付円払旅費一〇、九五五ドルを含む）を含め、総予算として七、〇〇〇万円を計上しております。

会員各位におかれましては、何卒この計画の意義を御了解戴き、絶大な御支援を御願ひ致す次第であります。（昭和三十八年五月）

◇ 第二五回小集会のお知らせ

・なめこを食う会（高頭翁碑前祭と弥彦山または銀山湖探勝）

・十一月二十三、二十四日

・長岡市八方台国民宿舎

・主催、日本山岳会越後支部

ヒマラヤ委員会

経過報告

ヒマラヤ委員会

昨年九月四日の第三回拡大ヒマラヤ委員会で、旧ヒマラヤ委員会はヒマルチュリ登山後の任務も終了したので解散することになり、新たな構想のもとに新ヒマラヤ委員会の人選を、楨、日高、松方、三田の四長老に一任することになった。その後九月十三日の理事、評議員会で三田委員長よりこの間の経過説明があり、旧委員会の解散が承認され、新たに松方会長より新ヒマラヤ委員会のメンバーとして、三田幸夫、加藤泰安、辰沼

広吉、村木潤次郎、今西寿雄、梶本徳次郎の六名が指名された。新ヒマラヤ委員会の目的は、次期JACの目的とする山の選定、登山時期の決定、隊長の選出にあった。

十月二十五日、第一回ヒマラヤ委員会を新委員六名全員出席のもとに開催し、委員を強化する意味で、新たに谷口現吉を追加することにした。

十一月二十二日、第二回委員会

では、ヒマラヤ委員会の性格論が論じられ、村木を中心とする事務局の設置を決めた。事務局のメンバーには登山技術研究委員会にあつてアクティブに今回のヒマラヤ計画を推進した川上隆、片桐理一郎、松田雄一、高橋進、田辺寿、山野井武夫、竹田寛次が取敢えず加わることになった。

十二月十日、第三回委員会。事務局のメンバーも加わって、拡大ヒマラヤ委員会開催の動機から、今日に至るまでの経過説明、ヒマラヤ委員会の性格論、目標とする山についての検討が行われた。

一九六三年一月九日、第四回委員会。前回同様、目標とする山につき検討が行われ、エヴェレスト、K2、カンチェンジュンガ等が具体的に再検討された。

二月十四日、第五回委員会。目標とする山をエヴェレストに決定した。

三月十四日、第六回委員会。事務局より提出された一九六四年秋の偵察、一九六五年春の登頂計画、予算案が検討された結果、一九六五年一本、予算七、〇〇〇万円の線が打出された。

三月二十九日第七回委員会。第六回の委員会で決定された線に沿って事務局により作成された予算を再検討し、アブリケーションの提出、登山許可折衝のため、三田委員長のネパール派遣を決定した。

四月八日、外務省を経由して、一九六五年エヴェレスト登山許可を申請するアブリケーションをネパール政府に提出した。

四月二十日、日本山岳会総会の席上、松方会長より、エヴェレスト計画の説明があり、三田委員長のネパール派遣が発表された。

四月二十三日、第八回委員会。三田委員長訪ネの事務打合せが行われた。

五月二日、三田委員長羽田発。五月十二日、ネパール政府より一九六六年の登山許可を取得。

五月二十七日、三田委員長帰国。六月四日、第九回委員会。三田委員長より現地での交渉経過につき報告があった。

七月三日、第十回委員会。エヴェレスト計画の実施が一九六六年プレ・モンズーンと決つたので、これに伴う具体的なエヴェレスト委員会編成問題が論じられ、今回のヒマラヤ委員会は、一応の任務も終了したので、発展的に解散する方針を決めた。

七月四日、理事、評議員会において、三田委員長より、ヒマラヤ委員会の経過説明が行われ、九月迄にエヴェレスト委員会を編成したい旨の報告が行われた。

(38・8・15) 以上

登山峰エヴェレスト
報告折衝許可

ヒマラヤ委員会

非非非非非非非非非非非非非非非非

三田委員長通信

◆第一信 カルカタ五月五日発 三田幸夫)……省略

◆第二信 (カトマンズ五月十日発、三田幸夫)

五月七日 I.A.Cでカルカタからカトマンズ到着。ロイヤルホテルに到着。早速外務省訪問(儀典局 Protocol Section 及び次官補 Under Secretary)

五月八日 外務省訪問(外務次官 Foreign Secretary 及び担当課長 Section Officer)

インド大使館訪問(駐在武官 Military Attache)

五月九日 Dolendra Shah 家及び日本・ネパール文化協会訪問

午後、ゴダバリ(釣池)とパタン市見学。夜はインド大使館駐在武官 Col. B.D. Mansingh 邸の夕食会に出席。

五月十日 Swayambu-nath, Hanuman-doka, ネパール博物館

見学。D. Shah 邸で昼食会。

Pashpati-nath, Both-nath 見学

九、十、十一の三日間は、パキスタン大統領アユブ・カンの公式訪問で当地は国をあげて歓迎の模様。従つて、外務省登山関係並びに儀典課等の要人達は大変な多忙さで、会見の時間を得るのは容易でなかった。が、神原君の顔で一

応の要談は済み、J・A・Cの意志は伝える事ができた。

上の要人達は一樣に、最善を尽くすといつてくれているが、65年がインドに book されている事はこれ迄に神原君が各有力な筋から確かめている事で、動かす訳には到底いかない。又、担当官もそう明言していた。その担当官の言うのに、64年はドイツ、65年はインドに決定済み。66年は南アフリカ（何処の国かは未だ確認出来なかった）が申込済みだが、Royaltyは未だ支払われていないから有効ではない。日本が、それ以前にそのRoyalty約三六ドルを支払い申込書を提出しておくのが最善と思うと明言してくれ、Applicationのformを呉れた。この形式は新しいものとの事。（十五頁参照）

依而、東京でも話合った通り、66年迄逃してはと、一応申込み決心をした訳で、直ちに横氏宛、ロイヤリティ払込について承諾を得たい旨電信を打った次第である。

◆第三信（ニューデリー五月十六日発、三田幸夫）

カトマンズの十、十一、十二の三日間は、既報の通り、アユブ・カン大統領の滞在で政府はテンテコ舞、政府の関係者との折衝はお手上げだったが、色々と手を廻わし、交渉を続けた。

十二日早朝、空港に礼砲の響き

が聞え、大統領の立出を知り、正午近く外務省を訪れたが殆んど空席、しかし正午になり、追々皆出揃って来たので、最後の折衝にとりかかり担当官 under secretary Shardur Rana の室に他の担当官を集め、神原君が Witness となり、小生自ら traveler's check にて、三六ドルを支払い、レシートを受領した。

これで一応66年度は日本隊に確約したことになり、あとは、正規の手続きをふめばよい。レシートに66年度と明示されていない点を追求した処、これは先方の好意あるところで65年にインドがやれない事が分った場合には、65年向けに適用する場合もあるものだと説明であった。

この日の夜、かねてからの計画通り、ネパール側の要人連をホテル・ローヤルの大広間の晩餐に招待した。招待者はカイザー・シヤムシェル陸軍元帥夫妻（Field Marshal and Rani Kaiser Shamsheer Jung Bahadur Rana）を主賓としナラ・シヤムシェル大將夫妻（General and Rani Nara Shamsheer Jung Bahadur Rana）ネパール・スポーツ協会会長）外務次官 Major General Padma Bahadur Khatri 氏夫妻、外務省儀典局長（Chief of Protocol）Prakash Chand Thakur 氏夫妻、外務次官補（Under Secretary）

Shardur Shamsheer Jung Bahadur Rana 氏（担当は行政 Administration で登山、国内旅行を扱）Section Officer（日本の課長に相当）で登山担当の Narendra Bikram Shah 氏、同じく旅券担当の Chuda Bahadur Hamal 氏同じく旅券担当の Sundar Nath Bhattarai 氏の十二名、これに主催者側として私と神原君夫妻。主客とも終始胸襟を開き、まことにごやかな晩餐であった。

翌十三日午後、出国手続きをすませて名ごり惜しいカトマンズ空港からニューデリーに向った。

なお今回、カトマンズ滞在中は会員神原君夫妻に大変お世話になった。同君は政府関係要人達とは極めて親しく、同君のお蔭でどの位助かったか解らない。今後の連絡その他の問題は、すべて同君にお願いすることにした。

ニューデリーには、ダスト・ストームで薄暗くなつてから到着、会員嶋原、石島の両君に迎えられた。以後嶋原邸に厄介になることにした。

翌十五日は、国防次官 S. S. Khara 氏が突然の好意で、五時のお茶にエヴェレスト関係の主な連中を官庁内の広間に集めてくれ、甚だ友好的な会合が行われた。当方、服部公使、嶋原、石島両君も同席。先方は登山界で Khara 氏に次ぐ大立物 Sarin 氏、サミッタ

の Kohli, Sonam, Kumar 外数名。エヴェレスト西山稜の難かしき等について論じられた。

今後情報交換、両方の友好関係を密にしようとも話合った。幸い会員の嶋原、石島両君がここに常駐なので、J・A・Cとの連絡は両君を通じればスムーズにいくので、暫くはこの方法を取ろうという事になった。彼らは冗談半分に（？）64年はドイツが譲るかも知れない。そうすれば65年は日本に譲りますよ、インドは64年でも直ぐ出られる態勢にある。又、日本のルートは何処にするのか等話はずんだ。そしてインドにできる事は何でも役立たせてくれとの申出。当方も同様と挨拶しておいた。

インドは今、なかなか緊張状態で外国人にとっては何かと不愉快な事だらけだが、今回の山の会合を見て、服部公使もすっかり喜んで、大いに勉強しますとの事だった。松平大使も甚だ親切、山への理解もあり、先日はKonoのロータン峠へも行き、昨日から十日間の予定でブータンへの旅に出発した。外国大使では初めての事だそう。テンジンの話も出て、甚だ残念がっておられた。色々誤解もあったそうだが、又ゆくり打合せをする事にした。

Khara 氏以下、皆日本の活動に関心を持っている。嶋原君所持の「山岳60年」の写真内容等を見

て、初めて、その内容の豊富さを知って更めて驚いている。

「マナスル」と「山岳」の何部かを贈る約束を Khara 氏としたので、早速送って頂きたい。（注：送付済）

今夜は八時から Col. Kapur（国防省 Liaison 関係—東京の Col. Mehta が予め arrange しておいてくれた）邸の夕食会に招かれている。矢張りエヴェレスト関係者が来るという。

Col. Khanna は未だ病氣の様子。

今日までの報告概略以上。

（文責…松田）

本 号 目 次

- ・エヴェレスト峰登山計画について……………一
- ・ヒマラヤ委員会経過報告……………二
- ・エヴェレスト登山許可折衝報告……………二
- ・千葉大マンブール初登山……………四
- ・東大・バルトロ・カンリ初登山……………四
- ・同志社サイバル遠征隊……………五
- ・北大西ネパール遠征隊……………五
- ・カトマンズ所感……………六
- ・穂高岳山荘四十一年の記念登山……………七
- ・「高山深谷」と対面……………八
- ◆図書紹介……………一〇
- ・山梨支部懇親会……………一〇
- ・東京支部第二回登山技術講習会……………一一
- ・ネパール政府登山規則改正について……………一四

ヒ
マ
ラ
ヤ
便
り

千葉大隊

ヌンブール初登頂

松尾宏

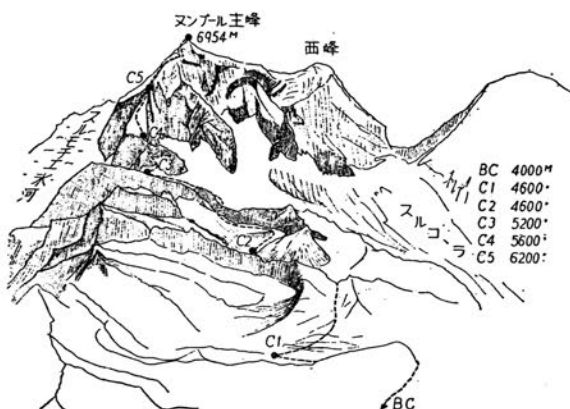
永らく御無沙汰いたしました。
 出発までにはいろいろお世話にな
 りありがとうございました。おか
 げで五月二十九日、ヌンブルの
 登頂に成功でき、いくらか御迷惑
 のお礼が出来たような気持です。

ヌンブルは、地図などから予想したより、ずつとけわしい、むずかしい山でした。ベニコラとスルコラの地図上の誤りは顕著なもので、これですっかり日数をくってしまい、又キャンプ数も五つをかぞえるまでになってしまいました。ジュンベシを出発したのが五月一日、約一週間の偵察で、地図の誤りを発見し、南稜ぞいのルートを取りましたが、C・Ⅱ・(五二〇〇米)から先の岩峯がむづかしく、又長いので放棄し、改めて、スル・コラのツメにC・Ⅱ(四六〇〇米)を移し、C・Ⅲ(五二〇〇米)を南稜最後のコルに作りました。このコル附近は広い雪原になっており、ここから頂上まで一気に突き上げておりま

す。C・IVは急なルンゼを登り切った氷の出つ張り上に張りました。これが十七日、高度は五六〇〇米でした。天気は午前中晴、午後吹雪とはんで押したような毎日です。C・IVからが青氷のむき出した斜度六〇に近い急な壁がはじまります。最初高度差三〇〇米と読んでいたのですが、三〇〇米のフィックスド・ロープがなくなつた時、まだ氷の斜面は二〇〇米以上つづいており、すでに五月二十三日になっておりました。この時期は天候が比較的良く、西ネパールの山々が良く見えしました。

五月二十四日、私とシエルパのミンマ・ツェリンの二人で一挙に頂上を狙ったのですが、六五〇〇米辺りの西方に面した斜面から猛烈な風となり、危険を感じて退却しましたが、この時C・Vを作る必要が分り、上部の偵察もできました。しかし、二十五日から天候は又悪化しだし、毎日ステップを駆け、シュトウ・ラビーネをがんばるくいながら、少しずつ荷を上げ、五月二十八日、六〇〇〇米にデポした荷(C・V用)を私とミンマが担いで六二〇〇米附近の岩棚にC・Vを設営し、入りま

翌、五月二十九日二人で頂上に登りましたが、C・Vからは困難



さがなくなり、無数のクレバスに
 気を使うだけで済みました。頂上
 は完全な頂上の形態を持ち、一人
 立つのがやっとで、交代で立ちま
 した。ジャヌーの時と同じく雪稜
 上の交代はピッケルにつかまり、
 一人が斜面に下りながらまわりこ
 んで行いました。頂上に立つ前か
 ら風雪となり帰路視界が五〇米程
 となり、クレバス地帯で往路を失
 い、勘で降りましたが、四時頃わ
 ずかにガスが切れ、からくも往路
 に戻りましたが、ガスが切れかけ
 た時、ミンマ・ツェリンは合掌し
 て「晴れてくれー」と叫んだ程で
 す。私もほっとしました。

V 泊り。三十日は、二十九日に輸

をかけた風雪で、C・Vは今にもテラスから押し出されそうでした。十一時テントを出てC・IVに降りました。急斜面と氷の上の新雪に苦労し、C・IVに着いたのは三時すぎでした。御承知と思います。が、大阪市大にアブレたミンマ・ツェリンが私達に参加したことも幸運でした。彼の技術は、ヒマルチュリ(慶大)ランタン・リルン

(大阪市大) ジャヌ
(フランス) で実証済
みでしたが、すばらしいものでし
た。C・Iの設営の時から彼と組
みましたが、とうとう頂上までザ
イルを組んでしまい、すっかり親
友になりました。

ヌンブルは本当に美しい山でした。ほとんど独立峰に近く、キャリオルングと共に、ヌンブル・ヒマールといつてロルワリンと區別してもよいように思いました。ジュンベシ等では、ヌンブルをカタン（三つの峯？）、キャリオルングをコーラ（長い山？）といい神聖なものとされております。往路、山に近づくにつれて、カタンに登るということは禁句にしました。エヴェレスト街道は、変化にとんで面白いルートです。肝心の

ロルワリンに入れなかったのが残念ですが……。

とりあえず報告をかねてお礼まで。会の皆様に宜しく。

(六月二十二日付カトマンズにて)
松田雄一あて)

×
×
×
×²
×
×
×
×
×
×
×
×
×
×
×

東大カラコルム遠征隊
バルトロ・カンリ初登頂

島澄夫

第四信（B・Cより）
御無沙汰しました。

・七月十二日、バルトロ氷河、南ガッシャブルム氷河右岸約五〇〇mの地点に、B・Cを建設して以来、七月二十一日・二十三日の二日間、七月二十九日・八月一日の四日間、の二回降雪に見舞われた。ほかは、ほとんど問題もなく、C I（五五〇m）、C II（五五五〇m）、C III（六六〇〇m）、そして八月二日にC IV（六九五〇m）と遂次前進キャンプを Conway 氷河側に建設して、八月四日、奇しくも京大チヨゴリザ登頂成功と同日を期して、快晴の天候を利用して午前九時三十五分、若い隊員二名（柴田武夫、河野長）が第一次登頂に成功し、小生も第二次登頂隊として（島澄夫、藤本慶光）約二十分おかれて、バルトロ・カンリ主峰（七三一二m）に立つことができました。

いま再びB・Cに戻り、数日の休養の間、氷河の調査、氷質の分析、放射能測定など、各種の学術調査を行っておりますが、八月十三日にはこのなつかしのB・Cを立ち、スカルドに向い、九月中旬にはカラチに出る予定であります。

JACエヴェレスト遠征のことなど風の便りに聞いておりますが、その後の進展はいかがですか。

先ずは登頂成功の御報告と御あいさつまで、JACの皆様によろしく

(一九六三、八、九、バルトロ
氷河五〇〇〇mB・Cにて) Ⅱ

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

同志社大サイバル
遠征隊

平林克敏

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 ボンベイからニューデリー經由
 カトマンズにきて一週間になりました。
 一九六〇年に来た時と較べて
 余りにも目まぐるしい変貌に少々
 驚いております。今日はネパールの
 近況についてお知らせ致しまし
 ょう。

外務省の内容もすっかり変り登

山係をつとめる Narendra Vikram Shah 氏は、実に頭の良い好

青年で、てきばきと業務を処理してくれませう。一度神原氏に挨拶に同行して載き、その後小生三度足立を運んだだけで西北ネパール入の困難な問題を、すべて処理してくれました。ピトラガール立入は二九日付インド政府から許可が下つたので、インド、ネパール国境のジュラガットで通関が出来ることになり、Import Licence もバイタデに入るになりました。荷物はすべてピトラガールで開きバクタデのカストム・オフィサーが

ジュラガットまで出張してくれる
とのことですよ。

サイパル登頂後隊を三隊に分けて横断する件も、調査ということではなく、帰路が異なるだけという

理由をつけ、ネパール政府のオスマン・ピザを三枚作成して戴き、万事OKです。従ってサイパル登頂後一隊を最も北回りトルボ地方を通ってポカラへ、二隊はジュムラへ入り、この中の一隊はネパール・ガンジヘ直行、他の一隊はカンジロバを見てドオラギリ南面をポカラにする事にしました。

アピの時のリエゾンのラナ君は英國の女性隊に同行し、シミコッソトからムグまで行ったとの事で、大分広く歩いておりますので、今回もリエゾンに交渉しましたが、ドオラギリ二峰の隊について明日出発するということで、残念ながら同行不能になりました。オーストラリア隊の他、ランタン二峰にも一隊が入っている様です。

ヒマラン・ソサエティの規則には不合理な点が多すぎます。ソサエティでアレンジできないポーター代のコミッション迄とられてはかきません。今回も私は、ポーターはネパールの西 Endpoint で儲けるのだから、もしコミッションを要求するのであれば、ソサエティから誰か一人ピトラガルまで出張して規則にあるポーター代で儲けてくれる様交渉しました。しかし乍ら外務省の声がかりもあって結局、不合理なコミッションをと

られました。(今後は、外務省とヒマラヤン・ソサエティーのルールを変更するといっております。)

我々の備ったシエルパは次の通りです。

Sarder : Pasang Phutar III

Cook : Hlakpa Tsering

Sherpa : Pemba Tenzing

Kami Pasang (25)

Ang Pasang (30)

今回のシエルパは素晴らしいシエルパばかりです。申原氏の力で

よるところ大なるものです。西北
ネパールに入った事のあるベテラ
ンばかりで、これ以上のシェルパ
はのぞめないとこです。サールダ
のパサン・プタールⅢは他のシェ
ルパに見受けることのぞきたい
落ちつきをもっており、うまく使
えば、今後共、親日のシェルパに
なりそうです。

なお今回はインド側の特別の地区を通るのでこの許可取得に苦労しましたが、参考迄にインナー・ラインを含むインド政府のきめた特別地区は次の通りで、この通過にはめんどむな申請フォームがあります。

1. Assam
2. Darjeeling, Coock Bihar, Gai
naiguri, Maida and Dinaipur
district of West Bengal.
3. Utkashi, Chamoli and
Pithoragarh
4. Kinnaur district of Himachal
Pradesh

5. Lahaul and Spiti district of Punjab.

会の皆様に宣しくお伝え下さい
(七月三十一日付、カトマンズにて) 松田雄一宛

遠征隊

遠藤禎一

★ ★ ★ ★ ★

私たちの西ネパール遠征に際しましては色々とお世話になり有難うございました。お蔭様で七月二七日ボンベイに荷物、隊員とも上陸、その日のうちに通関をすべてすまし、二八日三等車にてネパール・ガンジに向い、七月三一日隊員、荷物ともネパール・ガンジ・ロードに集結致しました。予定通り八月一〇日にはキャラバンに出発致します。当地は意外に涼しくしのぎやすい毎日が続いております。帰国は十二月下旬の予定です。会の皆様に宜しく。

(八月五日付、ネパール・ガンジにて) 松田雄一宛

カ・ト・マ・ン・ズ・所・感

神 原 直 子

今年もカトマンズは六月に入り毎日晴れたと思うとはげしい雨が降るといった不順なお天気、モン・スーンシーズンに入り、つい一週間前からはネパールガンジール行きの国内線は、飛行中止となりました。コンクリートで固めた飛行場はまだカトマンズのみ、その他登山隊となじみ深いボカラ、東のピラトナガルは全て牧草の生い茂る飛行場、レーダーの整備もなく、昨年はこのモン・スーン中二台の飛行機が落ちていたので止むを得ない中止といえましよう。

さて、にぎやかな話題をまき散らして行ったアメリカ隊をはじめとする今春の登山隊は今や殆ど本国へ帰り、秋美しいヒマラヤがくつきり盆地に顔を出すまで、ここ二、三ヶ月のカトマンズは静かに過ぎてゆきます。

今年の隊の中心は、やはり大規模な遠征隊を送り込んだアメリカのエヴェレスト。この隊は三月の出発時から九五〇名のポーターを連れて行った、とカトマンズ住民の話題の種でした。大成功をおさめて元気に帰って来た隊長、ディレンファース氏をはじめ、隊員

にインド大使館のレセプションでお目にかかりましたが、ひげをはやした元気の良い明るい感じの人々で、私が日本人と分るや、ネパールに来る前、買物の為に寄った日本のお話、そして隊員が一つづつ持った日本のカメラをほめてくれました。しかし、当地で一番大きなホテルであるホテル・ロイヤルを我が者顔で占領し、よれよれの半ズボンで役所から夕食時の食堂にまで現われる多勢の隊員の姿は、インド人同様服装に大変うるさいネパール人には理解しがたく、この隊には、クレイジー隊なるアダ名が付いてしまいました。トラックの上から大げさに愛嬌を振りまく青い目のアメリカ人隊員に、さっと答える程ネパール人はまだ外人馴れしていないのでしょうか。長い間がっちりイギリス式を仕込まれていたネパール人の、礼儀に対する態度はボーイだからといって決してあなどれないのです。さて、この隊には、四名の隊員夫人がカトマンズまでやって来て手紙の中継その他の雑用をしながら御主人の帰りを待ちわびていました。もう一つタウチェに登ったヒラ

リーのニュージランド隊も、隊員が一所懸命山のルート探しをやっている時、ヒラリー自身は、さつと飛行機でカトマンズに奥様を迎えにやって来て、一諸にベースキャンプに出かけて行きました。ヒラリーにとつては、この国も隣さんの如く、昨秋もお目にかかりました。ともかく山に登るのが楽しくて仕方ないといった感じでした。カトマンズに帰って来た後、ヒマラヤン・クラブのカトマンズ支部長ワイリー氏（イギリスのミリタリー・アタッシェ、ハントのエヴェレスト隊の隊員）の所の会には奥様共々若いニュージランドの隊員に囲まれ、実に楽しそうだったとか。あいにく私は出席出来ませんでしたので、主人が話してくれました。今カトマンズには主人を含めてヒマラヤン・クラブの会員が六名、折にふれ、会を持つては、山の話に夢中で楽しい時を過しております。

今年も例年の如く沢山の日本隊がやって来ました。先日もあるデリーの大使館員曰く「いまや日本民族のエネルギ・発散所は、戦前の満洲にかわってヒマラヤだね。」ともかくそれぞれの隊の成功、不成功にかかわらず一人でも多くの人が美しいヒマラヤ——しかしきびしいヒマラヤに接するという事は、何より喜ばしい事だと思えます。でも、こう毎年何々登山隊と云ういかめしい肩書きで来る国は他に例をみません。よく外国、例

えばイギリス、ドイツ、スイスの人々は、ここに旅行者としてやって来て、ちょっとした山用具をインド製で間に合せて、シェルパを連れ、スタスタ出かけて行きます。先日、シンガポールから来たイギリス人が、一人でダウラギリ一周をして二ヶ月かかり帰って来ました。丁度川喜田氏がいらしたのと同じコースです。ところが日本の登山隊を眺めてみると、まづ何より感じる事は山登りを楽しむ為にいらしたのだらうかという事、つまり、どの隊も多少の違いはあっても、余裕がないと思うのです。そして、大変おかしと思うことは、マナスル以来、すでに十年以上、たえる事なく毎年ヒマラヤに登る隊があるにもかかわらず、日本にはまだ一つのインフォメーション・センターらしきものがないという事。毎年毎年同じ苦労をくり返し、個人的知人をたよって個人的にネパール事情を聞き、帰るともうすっかり忘れて、次の年の隊に受け継いで教えてあげようとしません。つまり、いかなれば全然横の連絡がないという事です。こちらに滞在している私共のところには、主人が日本山岳会の会員でもありませんから、しばしば計画書が送られて来るのですが、「突然お手紙を出します無礼をお許し下さい」にはじまり、「私は誰とかの紹介でこの度、こうした計画を」とまったく殆んどが同じ質問の手紙なのです。つまりどのシェルパがい

しよう。

先日、エヴェレストの日本の許可をとる為、三田幸夫氏がいらして十年振りのカトマンズをなつかしそうにお話し下さいました。

十年前世話になったネパール人の家を訪ね、いつも全ての日本隊がお世話になるネパール要人をお招きして夕食会を開き、昔の山のお話を伺いながら、それは楽しい毎

日でした。そしてつくづく思ったのです。今日この頃、デリーやカルカッタで大使館員や商社の方々が顔をしかめる様な若い隊員とは精神が違ふと……。

今田重太郎さんが、ぼつりと、

——おかげさまで、この小舎も来年は四十年に

なりまして——
自分の心祝いのために何かと考えた末、頂上に方向盤を建てようと思うが如何、と言う。

——そりゃいい。登山者みんなの役に立つ、いい記念品ね——

去年の晩秋、紅葉の蒲田谷から新雪の山上に登った時のことだ。

——では私も、昔馴染のみんなを誘って登って来ましよう——

帰って、松方三郎さんというと、

——うん、やろう——
快諾を得たので心強く、山仲間を誘い胸にあたためてきた行事だ。

この小舎は大正十三年の

創立だが、松方さんも私も

その以前から穂高に親しみ沢山の岩小舎まで降って露営した経験者。……三千メートルの稜線に小舎の出来た恩恵を、ひしひしと痛感している。

八月十八日「信濃毎日」の山岳学校を了へ沢沢ヒュッテにいと、もう松方さんがいらしたので御一緒に登る。四十年の山の懐旧の感もごも。

……あの岩小舎の岩ははるか下方に落ち、二つに割れている——とかげって言葉は、この岩で出来たんだね——と懐しい。

重太郎さんの小舎が大きくなり、風力の風車で発電し、濁沢の雪溪から引いた水をジャンジャン使うのに、松方さんは——おったまげた——の連発である。

十九日朝、大喜びの重太郎さんは清酒一升を背

穂高岳山荘四十年の

記念登山

村井米子

男女も一緒に、歌って踊って……遂に重太郎さんが、嬉しくてたまらない様子で踊り出した。

二十日は快晴。小舎の窓から御来迎を迎え張りきって六時出発。重太郎さんに手をふりつつ、記念の穂高神社のお札と盃をリュックに、松方、折井、沢田、鈴木、野田、私は、奥穂——ロバの耳

——ジャンダルム——天狗のコル——岳沢ヒュッテ十一時半着。

富士から立山までの大展望をたのしみつつ、若き日の古戦場を指しつつ、松方さん曰く、

——思いがけず穂高を歩いた、これも重太郎さんの功德かな——
小舎主ばかりでなく、私たちにも印象深い記念登山となった。

午後には関口周也、鈴木郭之さん達若い会員と連れの女性、学生部の東京電気大学の野田耕一郎さん、上高地のレンジャーの沢田栄助さんも集って来た。

夜になると——お客に断ってありますから、大いに元気にと——先ず、松方会長の祝辞、供えてきた御神酒からはじまっていたの山上の大祝宴。診療所の先生

パトリック、小舎に働く

男女も一緒に、歌って踊って……遂に重太郎さんが、嬉しくてたまらない様子で踊り出した。

二十日は快晴。小舎の窓から御来迎を迎え張りきって六時出発。重太郎さんに手をふりつつ、記念の穂高神社のお札と盃をリュックに、松方、折井、沢田、鈴木、野田、私は、奥穂——ロバの耳

——ジャンダルム——天狗のコル——岳沢ヒュッテ十一時半着。

富士から立山までの大展望をたのしみつつ、若き日の古戦場を指しつつ、松方さん曰く、

——思いがけず穂高を歩いた、これも重太郎さんの功德かな——
小舎主ばかりでなく、私たちにも印象深い記念登山となった。

ずい分きつい書き方をした様ですが、私共夫婦はまだ若者の仲間入りの出来る年頃で、若い人の味方でありたいと願っているのです。文句をいいながらもデリーに行けばいつも登山隊を弁護する方にまわっているのです。ヒマラヤは素晴らしい、私もここにきて、また山麓を歩き、本当に世界中の人にこの美しさを見せてあげたいと思いました。一人でも多くの人々が楽しく旅行ができる様、先輩は後輩を助けて、山岳会でも、全岳連でも、地方の大学でも等しく利用できるセンターでももうけて、安全な楽しいヒマラヤ散歩にいらっしゃる様にできないものでしょうか。

ズを嫌がらず、少しは見物もして帰っていただけたらと、こんなに欲張った事まで滞在者の私達は考えるのです。

今、カトマンズには、私達夫婦の他、つい先日いらした伊藤氏、この方は、ネパールの薬草を探すアドバイサーとして二ヶ年の御予定です。あとはポカラより三日歩いた山の中のミッション医院で働いておられる岩村先生御夫妻と、川島、上田両看護婦さん。訪問する日本人の多い割りに長期滞在者が少ないのは、本当に残念なことです。どうも、日本には登山隊を通じてのネパール紹介が大部分の為伊藤氏も飛行場に着いたとたん、カトマンズが開けているので拍子ぬけたとおっしゃるあります。

(7)

前記のこととは別に、もう一つ感じる事は、登山を終えた日本の隊は、ほとんどが、まるで悪いことでもしたかの如くコンコンと帰ってしまったという事です。大きな夕食会、レセプションの必要はないにしろ、折角同じ所に帰って来たアメリカ隊なり、ニュージーランド隊なりを訪問し、親善、そして有益な話を聞くという事は、自分がめざした山のみならず多くの話が聞けて大変楽しい事です。

折角外国の山に来たのですから、登山が終わった後には、その国の人と友情を結ぶわずかな社交がどれだけの役に立つかはかり知れません。もっと欲を持って積極的に行動して、あまりカトマン

ずい分きつい書き方をした様ですが、私共夫婦はまだ若者の仲間入りの出来る年頃で、若い人の味方でありたいと願っているのです。文句をいいながらもデリーに行けばいつも登山隊を弁護する方にまわっているのです。ヒマラヤは素晴らしい、私もここにきて、また山麓を歩き、本当に世界中の人にこの美しさを見せてあげたいと思いました。一人でも多くの人々が楽しく旅行ができる様、先輩は後輩を助けて、山岳会でも、全岳連でも、地方の大学でも等しく利用できるセンターでももうけて、安全な楽しいヒマラヤ散歩にいらっしゃる様にできないものでしょうか。

ズを嫌がらず、少しは見物もして帰っていただけたらと、こんなに欲張った事まで滞在者の私達は考えるのです。

今、カトマンズには、私達夫婦の他、つい先日いらした伊藤氏、この方は、ネパールの薬草を探すアドバイサーとして二ヶ年の御予定です。あとはポカラより三日歩いた山の中のミッション医院で働いておられる岩村先生御夫妻と、川島、上田両看護婦さん。訪問する日本人の多い割りに長期滞在者が少ないのは、本当に残念なことです。どうも、日本には登山隊を通じてのネパール紹介が大部分の為伊藤氏も飛行場に着いたとたん、カトマンズが開けているので拍子ぬけたとおっしゃるあります。

前記のこととは別に、もう一つ感じる事は、登山を終えた日本の隊は、ほとんどが、まるで悪いことでもしたかの如くコンコンと帰ってしまったという事です。大きな夕食会、レセプションの必要はないにしろ、折角同じ所に帰って来たアメリカ隊なり、ニュージーランド隊なりを訪問し、親善、そして有益な話を聞くという事は、自分がめざした山のみならず多くの話が聞けて大変楽しい事です。

折角外国の山に来たのですから、登山が終わった後には、その国の人と友情を結ぶわずかな社交がどれだけの役に立つかはかり知れません。もっと欲を持って積極的に行動して、あまりカトマン

ずい分きつい書き方をした様ですが、私共夫婦はまだ若者の仲間入りの出来る年頃で、若い人の味方でありたいと願っているのです。文句をいいながらもデリーに行けばいつも登山隊を弁護する方にまわっているのです。ヒマラヤは素晴らしい、私もここにきて、また山麓を歩き、本当に世界中の人にこの美しさを見せてあげたいと思いました。一人でも多くの人々が楽しく旅行ができる様、先輩は後輩を助けて、山岳会でも、全岳連でも、地方の大学でも等しく利用できるセンターでももうけて、安全な楽しいヒマラヤ散歩にいらっしゃる様にできないものでしょうか。

ズを嫌がらず、少しは見物もして帰っていただけたらと、こんなに欲張った事まで滞在者の私達は考えるのです。

今、カトマンズには、私達夫婦の他、つい先日いらした伊藤氏、この方は、ネパールの薬草を探すアドバイサーとして二ヶ年の御予定です。あとはポカラより三日歩いた山の中のミッション医院で働いておられる岩村先生御夫妻と、川島、上田両看護婦さん。訪問する日本人の多い割りに長期滞在者が少ないのは、本当に残念なことです。どうも、日本には登山隊を通じてのネパール紹介が大部分の為伊藤氏も飛行場に着いたとたん、カトマンズが開けているので拍子ぬけたとおっしゃるあります。

前記のこととは別に、もう一つ感じる事は、登山を終えた日本の隊は、ほとんどが、まるで悪いことでもしたかの如くコンコンと帰ってしまったという事です。大きな夕食会、レセプションの必要はないにしろ、折角同じ所に帰って来たアメリカ隊なり、ニュージーランド隊なりを訪問し、親善、そして有益な話を聞くという事は、自分がめざした山のみならず多くの話が聞けて大変楽しい事です。

折角外国の山に来たのですから、登山が終わった後には、その国の人と友情を結ぶわずかな社交がどれだけの役に立つかはかり知れません。もっと欲を持って積極的に行動して、あまりカトマン

ずい分きつい書き方をした様ですが、私共夫婦はまだ若者の仲間入りの出来る年頃で、若い人の味方でありたいと願っているのです。文句をいいながらもデリーに行けばいつも登山隊を弁護する方にまわっているのです。ヒマラヤは素晴らしい、私もここにきて、また山麓を歩き、本当に世界中の人にこの美しさを見せてあげたいと思いました。一人でも多くの人々が楽しく旅行ができる様、先輩は後輩を助けて、山岳会でも、全岳連でも、地方の大学でも等しく利用できるセンターでももうけて、安全な楽しいヒマラヤ散歩にいらっしゃる様にできないものでしょうか。

ズを嫌がらず、少しは見物もして帰っていただけたらと、こんなに欲張った事まで滞在者の私達は考えるのです。

今、カトマンズには、私達夫婦の他、つい先日いらした伊藤氏、この方は、ネパールの薬草を探すアドバイサーとして二ヶ年の御予定です。あとはポカラより三日歩いた山の中のミッション医院で働いておられる岩村先生御夫妻と、川島、上田両看護婦さん。訪問する日本人の多い割りに長期滞在者が少ないのは、本当に残念なことです。どうも、日本には登山隊を通じてのネパール紹介が大部分の為伊藤氏も飛行場に着いたとたん、カトマンズが開けているので拍子ぬけたとおっしゃるあります。

前記のこととは別に、もう一つ感じる事は、登山を終えた日本の隊は、ほとんどが、まるで悪いことでもしたかの如くコンコンと帰ってしまったという事です。大きな夕食会、レセプションの必要はないにしろ、折角同じ所に帰って来たアメリカ隊なり、ニュージーランド隊なりを訪問し、親善、そして有益な話を聞くという事は、自分がめざした山のみならず多くの話が聞けて大変楽しい事です。

折角外国の山に来たのですから、登山が終わった後には、その国の人と友情を結ぶわずかな社交がどれだけの役に立つかはかり知れません。もっと欲を持って積極的に行動して、あまりカトマン

ずい分きつい書き方をした様ですが、私共夫婦はまだ若者の仲間入りの出来る年頃で、若い人の味方でありたいと願っているのです。文句をいいながらもデリーに行けばいつも登山隊を弁護する方にまわっているのです。ヒマラヤは素晴らしい、私もここにきて、また山麓を歩き、本当に世界中の人にこの美しさを見せてあげたいと思いました。一人でも多くの人々が楽しく旅行ができる様、先輩は後輩を助けて、山岳会でも、全岳連でも、地方の大学でも等しく利用できるセンターでももうけて、安全な楽しいヒマラヤ散歩にいらっしゃる様にできないものでしょうか。

ズを嫌がらず、少しは見物もして帰っていただけたらと、こんなに欲張った事まで滞在者の私達は考えるのです。

今、カトマンズには、私達夫婦の他、つい先日いらした伊藤氏、この方は、ネパールの薬草を探すアドバイサーとして二ヶ年の御予定です。あとはポカラより三日歩いた山の中のミッション医院で働いておられる岩村先生御夫妻と、川島、上田両看護婦さん。訪問する日本人の多い割りに長期滞在者が少ないのは、本当に残念なことです。どうも、日本には登山隊を通じてのネパール紹介が大部分の為伊藤氏も飛行場に着いたとたん、カトマンズが開けているので拍子ぬけたとおっしゃるあります。

前記のこととは別に、もう一つ感じる事は、登山を終えた日本の隊は、ほとんどが、まるで悪いことでもしたかの如くコンコンと帰ってしまったという事です。大きな夕食会、レセプションの必要はないにしろ、折角同じ所に帰って来たアメリカ隊なり、ニュージーランド隊なりを訪問し、親善、そして有益な話を聞くという事は、自分がめざした山のみならず多くの話が聞けて大変楽しい事です。

折角外国の山に来たのですから、登山が終わった後には、その国の人と友情を結ぶわずかな社交がどれだけの役に立つかはかり知れません。もっと欲を持って積極的に行動して、あまりカトマン

「高山深谷」と対面

高野鷹蔵

昨年の初冬に山の雑誌「岳人」の杉本誠氏が来訪され、明年一月号から、日本の山の写真の歴史を書きたいから、と言ふ話でした。今から六年前の秋に一度、この「岳人」社で、初期の山の写真について志村烏嶺君と私の対談を計画されたが、私は丁度その時には夏の間入院生活を送り、漸く帰宅静養中と言ふわけで、私の家に来てくれるならと、私の家で、志村君と私が老人どもの昔話に打興じたことが縁で、今度も私のところへ見えたわけである。

「岳人」の今年（昭和38年）の新年号から「日本山岳写真史」の題名で、最初に志村烏嶺君、次いで二月号に私がとり上げられた。そして「高山深谷」の内容装幀など細かに説明してある。

私は大正十二年の関東大震災で一切財産失ってしまった、それまで残っていた、くさぐさの山の思出の品物も記録も何もかもなくなり、裸一貫で今のところに移り住んだのであるから、本當の事をいふと、それ以前の事柄はまるで腑抜けのやうになって覚えてゐない。

震災のあとで、わが家の焼け跡に立って己れの書斎の跡に、そこそこのやうに溶け凝っている硝子の塊を眺めては、ただ茫然とただであった。数多くの岳友から借り集めてあった山の写真の原版に己れのと、戸棚に入れてあったのが、そのまゝ一塊りとなつてゐる。辻村伊助のスケッチ日記に入れた写真のフィルムなども勿論事実戸棚が落ちさうになったほど大量に集

つてゐたのであるから、その残骸も大きなものだった。その傍らに残つてゐる和本の灰を心静かに一枚一枚めくつたのは、今に忘れられないことであつた。それから四十年経つてゐる。

それ以来、私は「高山深谷」を眺める機会はほとんどない。古い会員の方々以外には「高山深谷」と言ふ名前さへ御承知ない方々も多いことと思ふが。

日本山岳会が出来たころには山の写真はまことに数少ないものであり、数少ない山登りをする人々の間でも一度山に行つて来ると其写真の要求がお互に強く、いささか困るほどであつたので、その要求の一端を充たすために、希望者を募つて会から写真集を出すことにした。

「高山深谷」と言ふ名前は小島さんが自著につけるつもりでゐたのを、こちらへ頂戴したわけで、平凡だが山と谷の写真集といふことをよく現わしてゐる。

「岳人」二月号を見ると、「高山深谷」全十輯の装幀写真が載つてゐる。これが、あれ！かと眺めるだけである。地震で失つて以来、眺めたことがない全容の写真である。実は古い会員で川島禄郎君（辻村伊助と同期の人で、福岡の大学教授だった人、四、五年前逝去）から手紙で「高山深谷」を二冊持つてゐるからと言ふので、それを戦後のことであるが、会の図書室に寄贈してもらつたことがある。しかし私は手がけた八輯全部の姿に接したことは全くない。

承るところによると「岳人」のこの全輯の写真は会員の小林義正氏（「山と書物」の著者）の所蔵によるものと知つては、矢も楯もたまたらず、会いたくなつた。しかし実を言ふと、私は老人になつて、寒い間はなかなか他行する気にならぬほど弱虫であるので、暖かくなつたら、お邪魔をしますから「高山深谷」に会はせて下さい、と、小林さんにお願ひをしたのです。

だんだん桜も咲き出しましたが、年来痛い左足がなかなか軽快せず、一日延ばしになつてゐる間に、藤島君（敏男）が小林さんに、「年寄りを歩かせないで、君が持つて行き給へ」と言ふ勧告があつたと言ふので、五月の中ばに、折角の日曜日をさいて、小林さんが重い包みを持参して、私を訪ねて下さいました。

世俗に言ふ「死んだ子に回り会ふ」と言ふ言葉がありますが、四十年ぶりで眺める「高山深谷」には、先ず何より色が抜けてはゐないかと言ふ心配でした。思ったほどでないのに、いささか、心安さを覚えまして。しかしつぶさに観て行くと、やはり大體の予想通り、或ものは情なくなるものもあり、また、予期したものはその通りでありました。

小林さんの御厚意で五十年ぶりに回り合ひ得ました「高山深谷」には私の若いころの山への情熱を今も、まざまざと思ひ浮べ得ます。まことに御厚意有難いことと老人も青春の回顧に耽りました。

第一輯は明治四十三年に出しました。この時は私の家の近くの写真館に頼んで焼いてももらひました。この人は前川謙三と言ふ

そのころの肖像写真家としては東京で著名の人でしたが、さて出来てきた印画を見ると、われわれ山党からすると、どうもピンと来ない。すなはちわれわれとは山についての感覚が違ふのであるから仕方がないと言ふことを悟りました。そこでこれは自分たちの手で作る以外に方法なしと考へたのです。

四十年ぶりに再び「高山深谷」を見て、この第一輯を眺めて、確かにいま見てもさう考へられるので、その当時の考へ方は間違つてゐなかつたと思ふ。そしてその印画の色が一向に変調してゐないことは、やはり当時一流の写真家が良心的に操作してくれたものだと思ふ。その後の印画は私自身が手がけたもので、印画の変色、変調と言ふことは当初から十二分に頭に入れてやつたが、印画の調子と言ふことに強く支配されたので、焼付、現像等にはいくぶん無理があるとは、当時でさへ考へてゐたほどで、為めに五十年経つた今日、これを見ると大分變つてゐるものもある。負け惜しみではないが、思ったほどではないのは、せめてもの私にとっては慰めである。そのころは真黒であつた私の髪の毛も、いまは白雪のごとく、黒いものは見当らなくなつてゐる。頂上には雪さへ残らぬほどに。印画は生きものではないが、年の瀬を幾とせと経て見れば、亦命と言ふものもある。

「高山深谷」は幾部作つたか記憶がない。せいぜい多くとも百二、三十部であることは、所用印画紙は、当時は全部舶来品であり、小形判に切つてあるものは、大いカビネ版一箱一グロス入りであつたし、それ

を全部焼いて、調子の良いものだけを撰んだのであるから見当はつく、時に二箱用ゐたこともある。頒布価は実費計算と言つても材料費だけ、それでも戦後のある時、前会長の日高さんが、当時学生の頃で値段が高く、買へなかったと苦情を言はれたので大笑ひしたことがある。

編集、企画、装幀、製作、一切合財すべて私の独裁で、これを許して下さつてゐた会の幹部諸君の寛容さは有り難いことであつたと今も考へる。そのかわりと言ふては変であるが粉骨砕身と言ふわけ、ヒマと労力を惜しまずに、やりとげたが今にして八輯、八年間よくやつたものだ、われながらいささか呆れてゐる。この八冊を出すについては、原板を私の思ふままに任せて下さつた諸君、装幀、装画等に多大の迷惑をかけた皆様、その最たるものは（故）茨木猪之吉君、私の家の土蔵の二階に軟禁して焼画の表紙を作つてもらつたことなど思ひ出はつきない。中村清太郎君、冠松次郎君には装画や篆刻、近藤茂吉君には資材蒐集。第四輯の皮表紙の焼印は鍍金家の香取秀真氏、これは其人の友人（故）武井真澄君が頼んで作つて下さつたもの。第六輯の横山大観画伯の題箋は、どうして得たものか、私は知遇を得てゐないので、と思ひ出さないもの、一度池の端の同家の玄関に立った覚えがあるから、名もなき当時の山登り好きの若者グループとしては、自由に動き回つたものと思ふ。それもこれも己れのためでなく、会のため、その道のためと言ふ気分が強くさせたものである。だから山岳会は由來人使いが荒いので、私達の後の方々も随分と苦勞されたことであらう。今後ともどうか会のため、この道のためおねがひいたします。

いささか手前味噌になるが、その当時の苦勞話を一、二書きます。全くのアマ写真家である私が第一に氣遣つたことは印画を永久に残したいことでした。つまり色が変らぬことが念願でした。その頃の私の写真知識から、その目的に最良最高のものは、「カーボン印画紙」でした。これはいまあるかどうか知りませんが、ゼラチンと顔料を紙面に塗布したものを、重クロム酸加里で感光し、焼付て乾紙し現像するもので、コロタイプ印刷と同じ理窟のものでした。

出来たものは実に見事なものでしたが、それを少しばかり稽古してみました。到底量産出来るものでもなく、小型印画には向かないことを知つて諦めました。当時の写真印画紙には大別して「現像紙」と「焼付紙」と言ふ二通りのものがあり、前者は露光して現像液で現像し、後者は焼出して後鍍金するものと、説明されてゐます。前者にもその感度により「プロマイト紙」と「瓦斯ライト紙」と大別されて居り印画の色や調子など色々と種類がありました。

私は家業で昼間は帳場、一と言ふ言葉は古いが一に坐つてゐねばならなかつたから「高山深谷」を作るとしても、夜業にやるほかはないから、日光で焼付ける「焼付紙」を使ふことは出来ない。どうしても電灯光でやれる現像紙を用ゐるほかはない。そこで採用の原板に適するやうな紙面、調子、画像の色などを考へて使用の材料を定めなければならぬので、手に入る限りの色々の印画紙を集めて、それぞれを試作して見なければならぬから、その買集め

が一苦勞である。当時は東京では今日もある「小西」と「浅沼」の二軒が写真材料の輸入商であつたから、この二軒に行つてはサンプルとして来るものを執拗に求めて来る。幸にして氣に入つたものがあつても、後荷が来なければ採用できないので、何よりも材料集めが一苦勞であつた。荒目の紙面のは、小形判の紙にはないから、引伸用としてロールになつた長尺のものを切つて使つたこともある。これが第一の苦勞であつたが、本當のこと、そんな苦勞、それが楽しみであつたから、一所懸命、それこそ欲得づくではやれないことであつた。

そのほか横浜には小さい見世（店）で米國あたりから小規模に写真材料などを取寄せる物好きな見世もあつたので、掘り出しものもあつた。台紙・装幀も一切自己流に考案しかかつた。従つて今日これを眺めると如何にも一輯から段々と進歩しつつある有様がわかり、われながら恥しくなる。

今日と違つてその時分には写真は大量生産する時代でなかつたから、同一印画紙を連続して焼付ける道具や、水洗ひする器械などは売つてゐなかつたから、それらも考案してからねばならぬから、先ず「ラビッド・プリンター」を作つた。素人の工夫であるが兎に角実用品が出来た。薬品類はすべて自身が調合する。

一番困つたのは印画の水洗ひである。自動印画洗滌器など全くない。仕方なくカビネ印画紙が六面並ぶやうにブリキ板水洗でバットを作り、色々と考案したが、結局最も原始的な方法で一枚一枚引き揚げては水を更へるほかはない。これには全く閉口した。寒い時期の水洗ひであるから手指は霜

がて腫れ上る始末であつた。しかし当時の智恵では印画の永久性は一にこの水洗ひにかかつてと知つては、怠けるわけにはゆかない。

印画の色は原面に適するやうに考へ、出来るだけ黒色のものを硫化法や、ハイポ明礬の方法でセピア調、温色調に仕上げたことは、これが一番色が強いことを知つてゐたからであるが、五十年後の今日やはりさうであつた。適当な露光時間で十分現像を進めたものは色が強いと考へてゐたが、やはり、さうであつたのも今見て嬉しい。印画を貼る糊にも十二分の注意を払つた。装幀のうちで一本の紐でアルバムを綴る方法は自分で考へたもので、誰れに教つたものでもないが、あまりうまい考へではないが、五十年経つて見て、独りでほへん

一枚の原板から沢山焼くのであるから、焼付の技量は太い上つた。当時は現像屋に奉公しても大丈夫と自信がついた。

山の写真は自分で現像しなければ本當の味は味へない。山から帰つて暗室に飛び込んで現像液をかけると、山のすがたが出て来る。思はず知らず板を取り上げて、光に透して見る。夢中になつて、あれ、あれと見てゐるうちに押へてゐた指のところが膜がペロペロになつたこともあるほど無我夢中になる。

今は私などでもD・P屋の御厄介になるが、写真を作るうま味の過半は流れてしまふ。山の写真の味は、自分から登つた人だけに判る妙趣である。「高山深谷」を八輯、一所懸命につづけた推進力は、ただこの「味」にだけ生きて行つたからである。



中村清太郎

図書紹介

一山会の所有になる記録類の目録が付録として掲載され、岩崎寺文書のうち絵図の目録も同文書の末にのせてある。学術的にみてもきわめて貴重なものと思われ、巻末にかけられた編者

越中立山古文書

木倉豊信 編

芦崎、岩崎両寺の古文書を総称した「越中立山古文書」が今回編者により見事に整理され、活字本となって発行された。門外不出のものとしていただけに、それをいま目のあたりにできることは、まことに有難いことである。芦崎寺一山会所蔵の芦崎寺文書は正平八年（一三五三年）のものから明治十年（一八七七年）まで三三七通、岩崎寺前立社壇所蔵の岩崎寺文書は明応元年（一四九二年）から明治六年（一八七三年）にわたる四二三通、ほか補遺五十八通をかかげ、編者による厳密な校訂と注記、大意がそえられ、また百枚以上の写真が付されその原型をうかがい知られる。芦崎寺文書には

による「立山古文書」と題する解題は、本書の理解を一段と深め、その評価を高めている。（山崎安治）

昭和三十七年十二月立山開発鉄道株式会社（富山市新桜町二四）発行、三二二ページ、写真多数頒価七百円。

シャモニの休日

近藤 等著

一年間フランスに留学した著者の見事なメモリアルがここに生れた。パリ大学の交換研究生としてフランスに渡った著者は、ほとんど毎月、月の半分をシャモニで過ごし、山とスキーを存分にたのうしている。まことにうらやましい話だ。

フランスの国立スキー登山学校の講習会に参加し、コンタミヌ、デメゾン、ボゾンなどというそう

そうたる連中に四十一才の著者がしごかれるところなど、まことにほほえましい。と同時にフランスの登山界における山登りの手ほどきがどのようにされているかを知ること、大変参考になる。レビュファールと組んで、グレボン、エギューユ・デュ・ジュアンからエギューユ・ロシュフォールの登攀とかせぎ、さらにドロミテを訪れ、有名なラヴフレドのチマ・ウエスト、チマ・グラランドと遊び、新雪のマッターホルン登山をこの紀行の焦点としている。

アイガーの北壁の登攀価値について、この北壁を登ろうとする者は、登攀そのものの技術的な難しさを楽しむために登るといふよりも、この北壁の名声にひかれて登るのであり、健全な態度ではなくこの北壁は推薦すべき登攀ではないとフランスの登山者の総合的な意見を紹介した一文も注目引く。ツエルマットの山岳博物館で十九世紀当初から現代にいたる登山用具などの見聞記、ウインパーのピッケルの柄に書きこまれていた「このピッケルを使った時には常に私は成功した」といった記事、マッターホルンのヘルリン小舎でガイド・レスの著者ら二人が、数年前ガイドレスでは泊めないと冷遇されたというK夫人の話とは★

金山平

懇親会報告

山梨支部

夏山を前に会員懇親会を金山平で梅雨の中休みの六月二十二日、二十三日に開いた。有井館のラン

プの灯の下に、霧の旅会、石南花山岳会の方々と交え、一晩語りあかした。東京から神谷、足立、村井さん方も参加され白馬山麓からとりよせた、ワラビ、ウトブキ、アザミ等を会員の大沢伊三郎氏の妹さんの若宮きよのさんの手をわずらわして珍品輸出、神谷さんからは山男の気持をつかまえた料理だとはめられ村井さんからも好評を博し主催者としても大いに気を強くしたところである。

地元からは八巻興議が出席され神谷さんと三井支部長を交えて今後の木暮碑の管理運営について充分な話し合いがなされた。

支部からは遠来の客を迎えて何かもてなしをと三井支部長自ら太公望としゃれこんだが山女のしつけが悪く戦果一尾で食卓を賑わす

までには至らなかったのは残念であった。また宴なかばに甲府より待望の笹酒が到着し一段と趣をそえた。

あと足立源一郎画伯の絵をかこんで全員で色紙に寄せ書きをし十時に閉会した。終りまで、若宮、室井、竹下、望月さんら女性の方々、支部の若い方々がランプの下で献身的に奉仕下さったことを心より感謝する次第である。

明けて二十三日は八時から木暮碑前に集り、ささやかな集合を持った。三井支部長の司会で神谷さんが木暮先生の思い出として、「レンゲツツジの好きだった先生は幅のひろい登山家であった。今でこそヒマラヤの研究も進み多勢の方々が登るようになったが、生前先生はきつとバルトロ氷河をこの足でふみたいといつてヒマラヤを徹底的に研究しておられた。

一方東京近辺の山々をもよく歩くかれ、植物、地質等民俗関係に至るまで勉強しておられた。どうか皆さまも幅ひろい登山家になってほしい。」と話された。

足立さんは、「木暮さんにお会いしたことはないが、昔なつかしい飯田町駅から甲府まで五時間、茅ヶ岳が見えだし夜が明け、中央線の垂崎、長坂間の未開墾の丘に咲いていたネムの木、レンゲツツ

★うってかわって親切にもてなされたという話などまことに興味深い。

装幀もスマートで、写真はいずれもダイナミックにそのムードをとらえている。

(山崎安治)
昭和三十八年七月白水社発行、二三〇ページ、写真多数、六五〇円。

歴史の山と高原の旅

安川茂雄 著

さきに発行された「歴史の山脈」の続編である。黒部源流と佐々成政、木曾の山々と旭将軍義仲、笠が岳と円空・播磨上人、立山連峰と佐伯一族、碎川上流とアルプスの古道、八が岳山麓と武田の軍道、奥利根上流と戦国群雄の足跡、尾瀬松枝岐と以仁親王、武相の山々と小田原攻防、甲斐路周辺と武田滅亡、碓氷峠と赤報隊の悲劇の十一章にわたり、歴史の史実と現在の山を結びつけている。

文献にもとずき、著者はたんにそれだけの山や、峠や、古道に、その史実を求めて、いにしえの面影をそこにさぐり、日本の山のかくされていた沢山の面を教え、てくれ、まことに読んで楽しい。

著者があとがきで述べているように、本書は、山好きの人びとより歴史好きの人を対象にまとめるよう書店側の注文に応じたとき

ているが、それだけに、それぞれの山や、山麓の古い史実がくわしく述べられていて、これまでの山の書物にみられないユニークなものがとなっている。槍が岳の項で「三昧発得記」にあるという播磨上人の天保五年七月槍より抜戸、笠への山稜縦走などの話なども興味深い。こうしただうもれた事績などもっとくわしく書いて欲しいものである。

南アルプス

—アルパイン・ガイド—

山本朋三郎 著

最近のようにどここの山も電源開発などで変化がはげしく、登山路にも新しいコースができ、山麓の事情も変じてくると、古い案内書は読み物としての興味以外には価値がなくなってしまう。南アルプスにも、かつて繰返し読んでは山への思いをかき立て、山から帰ってまた読み返し、思いを新たにしたいような案内記的名著がある。そういう本はいまでもなつかしい。

本書は表紙ビニール、B6版の山への携帯を考慮された実用的な装釘であるが、内容は豊富な写真に彩られ、読んで楽しく、見ても美しい書物となっている。

著者山本氏は本会静岡岡県支部にあって長く南アを歩かれた人であ

るから、姿容の激しい大井川水系の山々を含めて真によい著者を得たと言えよう。

南ア全体を八つに分けて詳しく述べているが、「前衛の山々」の中でとりわけ静岡岡県側がくわしいのは当然である。

冒頭に「登山計画のまえに」、巻末に「南アルプス概観」の章があり、それぞれ南アの特徴を説き、登山全般の注意に及んでいるがここに著者の真面目がうかがわれる。案内記が客観的に精確なことは無論必要であるが、薄い分量に著者の個性を加味し得たことは本書の成功であろう。(F)

昭和三十八年八月十日、山と溪谷社発行、一七八頁、色写真三葉、ほか写真図版多数、概念図行程表、山小屋一覧など。二〇四円。

「山岳」の礼状

毎号「山岳」を送付しているアメリカ山岳会のオーパリン氏から五十七年に對し左記のような礼状に接した。

14 July, '63

The Editor, Sangaku

Dear Sir

The current issue of "Sangaku" has been received and I very much enjoyed it. You and your staff are to be congratulated for maintaining such a high level of excellence in this publication.

Very truly Yours,

John C. Oberlin

ジ等の中から自然の美しさを甲州路は教えてくれた。最近乗物が便利になって来たが、楽しい旅は足で歩く旅だと信じている。木暮さんも若い人にはきつとこういっだろうと思う。」と。

なお、前後からの話合いで、このような集りを毎年五月第三土曜日、日曜日にかけて行うことを決定した。最後に同夜の献立を記す一、笹酒。一、山うどのくるみ。一、うとぶきのフレンチドレッシング。一、あざみの胡麻だれ。一、わらびのおひたし。一、わらびと山うどのすし。

一、バービキュー。一、万葉サラダ、一、手打そば。一、水羊かん。

参加者氏名

足立源一郎、中村謙、三井松男、吹野昭、神谷恭、瀬名貞利、八巻恭介、斎藤俊哉、村井米子、一柳兵象、望月雅郎、成沢正道、松本能次郎、一柳しず江、小池義正、今沢寛、野口末延、原田幹市、岩間弘雄、日本伸、平井和雄、君島久登、山村正光、竹下礼子、若宮きよの室井久代、望月正子、計二七名

(山村正光記)



第 2 回 登山技術講習会

日本山岳会
東京支部

▽日時 昭和38年5月18日(土)20日
▽場所 谷川岳

△趣旨▽

昨年の富士山に引続き、東京支部は、支部会員諸氏に安全な、楽しい登山のための正しい技術を、身につけていただくことを目的として、この講習会を開催した。

△受講者氏名▽

田中正智、須田信弘、関口博敏、伊東亮太郎、渡辺佳郎、関根智夫、蓮田 享、大貫健作、北村征義、松原貴代司、滝本令子、松永康子、中山典子、岸崎晶子、名越礼子、高柳喜代子、今井通子、守安慶子、紅露正枝、佐々木静子
(以上二十名)

△編成▽

○本部 チーフリーダー 山崎安治
サブリーダー 芳野越夫

マネジャー
ドクター

関口周也
杉浦耀子

○講師

鈴木伊和雄、姫田克己、伊沢英夫、竹内道雄、片桐理一郎、芳野越夫

○係

総務係 野萩 守
食糧係 錦織保清
会計係 山口節子、富田美知子
記録係 鈴木郭之
装備係 鈴木伊和雄

△行動概要▽

五月十六日、準備会、一八・〇〇、ルームにて。

五月十七日、二〇・三〇上野駅集合、団体乗車にて発車。

五月十八日(曇のち晴)土合着宿舎土合山の家着後仮眠、八・〇〇、山の家発、マチガ沢をキック

ステップにて登行、三の沢出合にて、キックステップによる登降練習、および滑落停止訓練一六・三〇山の家帰着、夕食後研究会。

五月十九日(曇のち晴)六・〇〇起床、七・三〇山の家発、マチガ沢をキックステップにて登降、三の沢出合附近にて講習、午前中

簡単にアイゼン歩行練習、昼食後制動確保の練習、これ等を反復練習し、一六・三〇山の家帰着、夕食後研究会。

五月二十日(晴)六・〇〇起床七・三〇山の家発、一切アイゼン

を使用せず、マチガ沢一の沢を登り、途中、積雪状況不良のため前沢に移動、コンティニューアスの場合の確保の練習を行う。終了後前沢をつめ、西黒尾根、小屋附近よりこれを下り、一四・〇〇山の家帰着土合発の列車にて帰京。

講 評

芳野越夫

今回の講習会は、東京支部の会員、団体会員および会員紹介者を対象とし、残雪期の山において、登山における基礎の重要性を認識していただき、基礎技術の習得と復習と、完全なメンバーシップを身につける事に主眼を置き、出発から帰着までの行動のすべてを訓練の対象とした。

今回は、時期としては新緑萌える残雪期の山であり、また雪上経験の少ない講習生も若干居り、そのため昨秋の富士山に比較して、若干の差異を感じたが、これは逆に本講習会をして、親しみあふれるものとなり、全員がゆとりをもって行動できる結果となった。また全員が、規則正しく真面目な態度でメンバーシップを保持し、基礎技術の習得に専念され、本講習会をして所期の目的を達成し得たことは、当事者の一人として喜びにたえない。

次に講習日数については、前回の反省にもとづき、一日加えて、

全日数三日とした。その結果、前回に比較して練習時間になき余裕ができて、各項目とも一応の効果をあげることができた。

特に、講習内容が基礎を主としたものであるで、夫々の項目をもっと掘り下げて見たいとの意見も講師の中で出たが、会員を対象とする関係上、このような講習会では、日数をこれ以上増すことは難かしいと考えられる現況である。しかし、三日間に芽生えた講習会会員間の懇親的な空気は、二日間の富士より、はるかに進み、各人とも大きな収穫が得られたのではなかろうか。

以上の諸項をまとめると、一応前回より色々の面で成果が上ったと思う。しかし、三日間としたために、講師の参加確保に非常に苦勞せねばならなかった。特に出発前日に予定した講師が参加不能となり、関係者は、代役の確保に奔走せねばならなかったことは、この点の難かしさを如実に示すものとして反省される。

技術面について見ると、一般登山界は地道に基礎を積み重ねることをせず、いたずらに派手な応用技術の習得にはしるきらいがありこの足もとの精進を怠ることが、多発する遭難の原因となっているので、「登山は基礎に始まり、基礎に終る」をモットーに、講習生諸兄に基礎技術の重要性に対する認識を深めていただくよう努めた。

残雪期および夏山の雪渓上を、アイゼンを用いず、キックステップだけで安全、且自由に登降できることが、あらゆる登山におけるバランス感覚に通じるものであり、この練習が、登山の基礎技術の第一歩である歩行バランスの習得に最適な練習法といわれている。そこで今回は、これに重点をおき、ゲレンデへの往復路を始め、これの習得に最も多くの時間をかけた結果、最終日には、大部分の講習生諸兄にかなりの上達が見受けられた。

東京支部としては始めての残雪期講習会であったが、昨年の第一回および今回の経験を生かし、講習生諸兄に正しい基礎技術をかため、更に高度の山登りに進展する基礎を確立できるように努めるつもりである。

第三回登山技術講習会

日本山岳会東京支部

- 一、目的 正しい登山のための
氷雪基礎技術の向上
- 二、日時 十一月三十日～十二月二日
- 三、場所 富士山 甲州側
- 四、宿泊所 五合目芙蓉荘
- 五、人員 三十名
- 六、申込開始期日 十一月二日
- 七、担当 芳野越夫

第五回国立公園大会

八月一日夕刻から霧島国立公園えびの高原で開かれた。よく整備された集団施設地区に義宮殿下をお迎えし、山岳、ボーイスカウト、ガールスカウト、その他の班が多数参加した。その際功労者として、本会々員牧野平五郎（富山支部）藤島玄（越後支部長）の両氏が厚生大臣から表彰された。

式はふり出した雨の下に開かれ、夜のキャンプファイアーも風雨にめげず賑やかにくりひろげられたが、風雨は翌朝もやまず、予定された野外行動班の登山やサイクリングが取りやめになったのは惜しかった。

わたくしは開式前に会員の加藤数功さんに導かれて五十年ぶりに高千穂峯にのぼった。

山のすぐ下までバスがかよい、みちがよくなり、低い石垣に囲まれて地面に突き立っていた頂上の逆鉾が、垣をめぐらしたお社にまつられているなど、ずい分変わったが、霧島山全体としては昔ながらの珍らしい姿態を存し、噴火口の辺から頂上に当るころ雲がわいて雨が横なぐりに吹きつけ、すこし下って来ると晴れるところまで五十年以前と同じだった。

（日高信六郎）



中村清太郎画

七月理事評議員会

▽出席者 松方会長、三田副会長
理事 折井、辰沼、金坂、山崎、
中島、武藤、古沢、梶本、松田、
深田、監事 野口、評議員 藤島
吉沢、神谷、望月、織内、東京支
部、中委員

議事と報告

一、支部長会議について
・例年七月中であったが、今年は
十月五日六日、上高地にて開催予
定とする。

二、学生部の近況について

(イ)文部省の大学山岳部アンケ
ートについて検討。二百校中の九
割位は指導を必要とする。遭難原
因は一般と異り疲労凍死より滑
落、雪崩に起因するものが多い。ア
ンケートの方法、集計について

も、今後検討する必要がある、尚
八月末頃今後の方針を定めたい。
(ロ)最近活動が活発なので、この
際登山の根本理念について強力に
指導したい。

三、神河内山荘について

・信濃支部より赤羽孝一郎を運営
委員追加推薦あり、了承する。山
荘利用について、一泊二食付会員
五百円、非会員七百円とする。

四、ヒマラヤ委員会について

・エヴェレスト登山許可一九六六
年取付の経過三田副会長より説明
あり了承。同遠征計画実施につい
ては、現在のヒマラヤ委員会を発
展解消して、強力に巾の広い組織
としたが目下検討中。

五、ルーム移転について

・体協はオリンピック迄には移転
の予定、新築ビルに三十坪と倉庫
五坪(坪二千円)程度仮申込みを
した。

六、富士山美化運動について

・新生活運動協会、朝日新聞社主
催、七月六日七日、本会より交野
評議員、東京支部錦織、中岡委員
を派遣する。今後も此種の行事に
は本会としても関心を持ちたい。

七、日本登山学校について

・川崎隆章氏の企画により七月一
日開講、本会と直接の関係あるも
のではないが、松方会長も出席祝
辞を述べた。田中薫会長が校長を
引受けられ、今後の方向づけによ
っては有益なものと考えられる。

以上

ネパール政府登山
規則改正について

ネパール政府は、一九六三年二
月十四日付をもつて Regulation

Governing Mountaineering,
Scientific And Similiar Expedi-
tion と題して十八条からなる新

規則を発表したが、これは一九六
二年一月一日付の規則(会報二二
二号参照)とこれに対する七月二
九日付一部改正(会報二二三号参
照)を綜合して整理したもので内
容は実質的にみて変わっていない。
即ち、新規則は次の通りである。

Regulation Governing
Mountaineering,
Scientific And Similiar
Expeditions.

February 14, 1963.

Rule (1) to Rule (XV) are quite
clear.

Rule (XVII) Expedition parties
from foreign countries
entering Nepal for climbing
the peak and undertaking
scientific research on Himala-
yas are hereby required on
their entry into the territories
of the Kingdom of Nepal to
make two separate declaration
regarding the details of the
goods required (i) for the
actual consumption in Nepal
and (ii) for the Expedition
back to their countries respec-

tively.

Customs charges shall be lev-
ied on the good of the former
category, i.e., the goods for
actual consumption in Nepal,
expect on the personal belong-
ings falling under the baggage
rules of His Majesty's Govern-
ment of Nepal.

Customs charges shall have to
be deposited with the custom
authorities for the goods fall-
ing under the latter category,
i.e., the goods for reexporta-
tion and the amount so depos-
ited shall be refunded on the
parties' exit from Nepal. Shou-
ld they, however, fail to
carry back with them the
declared goods under the latter
category, necessary charge
shall be debited from the above
amount in deposit.

Customs charge on no expedi-
tion goods, except cigarettes
and liquors, shall however
exceed ten per cent. a.v. Depo-
sit required to be made on
cash may also be made by
personal cheque.

Rule (XVII) Such parties shall
undertake to defray all their
cost in Nepal if possible in
U.S. Dollar or Pound Sterlin-
gs, and if not, in the currency
of the town country by exch-
anging them through the Min-
istry of Foreign Affairs.

Rule (XVIII) Other research par-
ties not falling under any
specific agreement shall not be
entitled to customs exemption.

Ministry of Foreign
Affairs,
His Majesty's Govern-
ment of Nepal.

即ち新規則 第十六条の第一項
が前の十六条。第二項が前の十七
条、第三項が七月二四日付の追加

山岳第58年内容予告

・山ときどき 松方三郎

・チャムラン 中野征紀

・サルトロ・カンリ 加藤泰安

・ヌプチュー 中尾佐助

・ダウラギリ一周 石坂昭二郎

・ビッグ・ホワイト・ピーク 高橋照

・インドラサン 酒井敏明

・G IVの写真とサラグラール F・マライーニ

・アルパマヨ 吉川尚郎

・山岳会入会当時と北アルプス 早期測量の思い出 高木菊三郎

・台湾山岳未到への想片 沼井鉄太郎

・台湾の山旅 藤田博

・チンボラソ 和田匡弘

・追悼 武智直道氏他 (続)

・ヒマラヤ登山年譜(続) 田中・馬場

・会務報告・英文梗概・写真約四

〇葉・総頁約二五〇頁

・編集 望月達夫

・発行予定日 昭和三十九年二月

(二二三号 訂正)

誤 正

6頁4段3行 出来ました

7頁4段6行相当に 出来まし

・ 19行相当の 歴史的

(二二六号 訂正)

12頁2段34行です。

Application form to be filled by the Leader of the Expedition

1. Name of the Expedition-
2. Country of Origin-
3. Sponsored by-
4. Financed by-
5. Personnel of the Expedition- (Biographical sketch and photo of each of the members to be attached)
6. Object of Expedition-
7. Name and Height of the Peak-
8. Index map of the area in question possibly to be attached-
9. Duration of the Expedition- (Period between the arrival in, and departure from, Kathmandu)
10. Route the Expedition would be following in Nepal-
11. Number of porters to be employed-
12. Number of Sardars and Sherpas-
13. List of the equipments to be attached-
14. Estimated total cost of the Expedition-
15. Estimated expenditure inside Nepal-
16. Have you read the enclosed regulations carefully?-
17. If so, do you agree to strictly abide by them?-
18. Other particulars, if necessary-

Dated:

(Signature)

N.B. No application shall be considered unless the above forms, duly filled, is endorsed and forwarded by the Government of the country to which the Expedition belongs.

事項であり、関税に関する事項はすべて十六条にまとめられている新規則第十七条は前の十八条と同一であり、第十八条が前の二十条である。尚前の十九条、規則が適用される日時は、新規則の発表された日時を以て行われるため新規則には省略されている。

尚その後ネパール外務省の登山関係担当の Section Officer (日本の課長に相当する) に Narendra Bikram Shah 氏が就任以来、同氏は登山に関する事務の簡素化について、努力をつづけられていたが今年五月には簡単な Application Form を作り、以後の登山申請はすべてこのフォームに基いて行われることになった。(日本山岳会エグゼクティブの申請も現地で三田副会長の手によりこのフォームに基いて行われた) 即ちこのアプリケーションのフォームは上記の通りである。(松田雄一)

◇第六回紅葉会のご案内

期日 昭和38年11月9、10日
場所 梅ヶ島温泉(一泊)
費用 宿泊費、バス料金とも一、五〇〇円

申込先 静岡市東鷹匠町五二
(山本静三郎方)
日本山岳会静岡県支部

3段13行、14行
に部族地方
十二、タール地

13頁1段10行 Editor Librarian

14行 カトマンズで カトマンズの

25行 Mr. Spin

8頁2段 鈴木敦之 鈴木郭之

9頁「決算書」 その正確なることを

14頁4段 戒武 戒武

15頁4段 会費六百元 会費二百円

◇上高地の本山山荘の名称について

これまで上高地山荘、神河内山荘と二様に書いてきましたが、今後は「神河内山荘」といたします

編集後記

編者の怠慢(八月長期の旅)の結果、本号がひどくおくれました。次号十月号はくれなゐにします。前号(二二七号)は半世紀前の剣岳登山の筆者、河合良成氏は本会の早期会員であり、終身会員です。紙面の都合で紹介不十分でした。念のため。

昭和三十八年八月二十五日発行

発行所 東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
日本山岳会

編集者 古沢 肇
電話 神田(四)八九五二番
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地